

書評

ナイチンゲール伝
図説 看護覚え書とともに

- 著：茨木保
- A5判／208頁
- 定価：本体 1800 円＋税
- 医学書院

評者

医療法人社団三思会法人本部
摂食嚥下サポート担当／看護師
NPO 法人口から食べる幸せを守る会 理事長
小山珠美

やはりナイチンゲールは
すごかった

ナイチンゲールの葛藤、闘い、行動、使命感、変革するたくましさ为一体となって伝わってくる1冊である。文字だけでは伝わりにくいことを漫画を通じて可視化することで、相乗効果を得ようとするナイスアイデアだ。

登場人物の表情、しぐさ、発する言葉の集合体には、思いのほか深いメッセージが込められている。しかも、150 年も前とは思えないほど時空を超えたリアリティーを感じさせる過去と現在とが融合した世界観が押し寄せてくる。

いつの時代も、壁や圧力にぶち当たりながらも、アグレッシブに乗り越えていくたくましさが必要だ。その意味で、やはり、ナイチンゲールはすごかった！

1 コマ 1 コマに没頭し、
自分を投影する

本書を手にして、「面白そう、漫画本になっているからすぐ読めちゃう！」とまず思った。ところが、実際に1コマ1コマ読み進めていくと、思いのほか時間を要した。それはまるで、引っ越しの荷物整理のときのような感覚だった。荷物を整理・整頓するはずが、懐かしいアルバムや思い出メッセージが出てきて、長時間座りこんで読みふけてしまう。それと似た状況に陥った。

ナイチンゲールと作者の価値観や世界観に触れ、それが確実に自分自身に投影されていく。「もしも私だったらどうしていただろう……？」とさまざまな場面にワープしてしまう。

なるほどと思うことばかりではない。「そうだそうだ！」とイケイケモードの気持ちが湧き上がってきたかと思うと、その一方で重々しい気持ちに陥ったりする。今の私はこれでいいのか？ 私が成すべきことは何か？ 自身の共感・葛藤・気概・希望の精神が次々と押し寄せてくる。なんと読み進まないこと！

ナイチンゲールは「闘う女」だった！

第1部ではナイチンゲールの苦悩と戦いを目の当たりして、自分のこれまでの生き方、時として情緒的な感情の露呈、人との関係性までもが、走馬灯のように浮かんで時間が交錯するという感情を覚えた。

あの時はつらかったし、悔しかったし、今もストレスだけど、ナイチンゲールの試練や苦悩と闘いに比べたら私の悩みなんてどうってことない。特に、35 頁では彼女は看護師になってすぐに、経営難に陥っている病院の立て直しの監督者となる。その時、「病人を回復させるものは、何よりも清潔な環境！」という信念を貫き通す。委員会のメンバーには、彼女の性急な改革に異を唱える者もいたが、彼女は妥協しなかった。「私の方針に従えないのであれば辞めてもらいます」。そして、無能な職員は解雇させられるか自分から退職した。

こうして病院はハード面、ソフト面共に一新され、近代的なナイチンゲール式病院が誕生した――。

著者も書いているが、まさにナイチンゲールは優しさと冷徹さ、謙虚と傲慢、慈愛と残酷さとを併せ持っており、生きるということはまさしく苦しくあさましいこと、それでも“闘う”価値があるということを教えてくれる。

ナイチンゲールがいかに悩み苦しんだ上でメッセージを残してくれたかが、漫画の中の表情や仕草からあふれるほど伝わってきた。個人的に壁にぶつかっていた時期であったことも重なり「そうだ！私も闘う女になるぞ！」と決意を新たにしました。

160 年前と今日がつながる

唯一、兵士とナイチンゲールらの笑顔が如実に出てくる 54 頁にはほっとし

た。スクタリでの最初の仕事は患者に「食事を与えること」であった。「まわりの人間が気を使って患者に与えるべきものとして、食事は呼吸する空気に次いで重要なものである」と書いてある。葡萄酒入りのスープの匂いをかぎ、あたたかくおいしいスープが口の中に広がり、のどを通った時の兵士の嬉しそうな表情が描写されていて、思わず「頑張る力が出てきてよかった」とほっとした。

おいしいものを食べると、人間は幸せな笑顔になる。そればかりか、頑張る力が湧き上がる。このページでの描写は単に食事を与えればいいのではなく、その人が「おいしく笑顔で食べられる食事は病気の回復力を加速する」ということがよく伝わってくる。しかしながら、ナイチンゲールが与えたスープをおいしく喜んで飲む兵士を見て、心よく思わない調達官が軍部の上司に「我々の邪魔をする」と告げ口するシーンがある。それをこっそりと見ていた彼女は「とんだ言いがかり」と鋭く2人をにらみ付ける。“ああ、私もこんな場면을幾度も体験したなあ”と思い返し、その時の私の表情はきつと彼女と同じ「この憎々しい奴！」だったのだろうと笑えた。食事の援助をしているときは緊張もするがとても優しい気持ちになれる。心のこもった食事を提供できる幸せを感じる。

「食べる」って、病気と闘い、頑張る勇気を与えることになるんだと再確認し、あらためて160年前と今日がつながった。過去、現在、未来をつなぐメッセージに嬉しさが湧き上がった1コマである。ナイチンゲールが生きていたらきっとこう言うだろう。「食べさせない看護なんてありえない!」と。

質の高い看護って素晴らしい!

第II部「図説『看護覚え書』」には、看護師としてやってはいけないこと、気

を付けなければいけないことがより詳細に描写されている。彼女の細やかな感性はすごい! しかしながら、この指摘と示唆を見事に描写している著者の感性の鋭さにも感銘を受ける。161頁「患者の観察」の描写には“そうだそうだ”とつい呟いてしまった。以下に引用する。

「よい看護とはどの病人にも共通するものと、個々の患者によって異なる特徴をよく観察することにつきます。“特殊な力”がある看護師は患者に影響を与えるものをよく観察しているのです。食事をうけつけず衰弱しつつある患者がいましたが、ある看護師に任せると、すぐに食べられるようになりました。彼女はただ、患者がスムーズに飲み込めるように食事を与え、枕をうまく頭に当てがっていたのです。患者によっては窓を開けたり、顔や手を洗ったり、首の後ろをぬれタオルで拭くだけで食べられることもあります。気がふさいでいる患者は元気づけると食べる気がでてきます。看護師にとって大切なのはこうした細かいことをよく観察することです」

“看護は観察で始まり観察で終わる”という言葉がすぐに浮かんできた。

よく観察すると、何が問題で、何をすれば、どんな結果を招くかが見えてくる。現場でよく「この人はむせる、食べてくれない、喉の通りが悪い」などといって食事を下げたり、危険だから止めてしまう医療関係者に遭遇するが、何を看て、どんな努力をしたのかを問いたい。うまくいかないのは患者さんの問題ではなく、自分の観察力とスキルが不足しているから! と思うことが多々ある。そう思って看護をしないとあっという間に患者は食事に対する興味をなくし、さら

なる生命力の消耗を来すことになる肝に銘じるべきである。

ここでは、食べることにこだわったが、そこに限らず質の高い看護を目指そうとする看護学生や仕事に迷いをもっている人たちには是非読んでもらいたい。自分が仕事として何をなすべきかを必ずや導いてくれる1冊である。

使命感を形に

第I部でナイチンゲールの生きていた時代背景や生きざまを知った上で、第II部を読み進めると『看護覚え書』の理解がいっそう深まる。彼女の本質を見抜く観察眼の鋭さ、思考力の深さ、ビジョンを実現する行動力の粘り強さを感じることができる。葛藤、自己との闘いがあったとしても失敗を恐れない彼女の行動力にはあらためて敬服する。そして、今に満足するなかれ! 悪は正す、正義を貫くという魂の強さがいたる場面で伝わってくる。ビジョンは行動に、失敗は次なる行動へとつながる。結果は成果をもたらし、未来への道しるべとなる。

112頁に、彼女の言葉として「神は世のためになる仕事をせよと命じた」とある。ここでも“使命感”って何だろうと考えた。辞書をひもとくと「mission: 自分に与えられた任務を果たそうとする気概」とあった。私ももう一度自分のこだわりを貫き通そうと思えた。そして、文字にしてみようという決意を起こさせてくれた。

とはいえ、この1冊を仕上げるまでにどれくらいの時間と労力と根気を要したのだろう。途方もない作業をやり遂げていただいた著者の使命感あふれる粘り強さと行動力に感謝したい。